Root Research

ISSN 0919-2182
Vol.34, No.1
March 2025

Japanese Society for Root Research

目　次

【巻 頭 言】
会員の皆様へ …… 1
【連載　根の研究の 30 年を展望する】
連載を終えて～編集後記～　福澤加里部 …… 4
【情　報】
菜根譚　野菜の根の話　27. トロロアオイ　中野明正 …… 6
【会　告】
根の研究 発行形態に関するアンケート（2024 年 12 月〆切）集計結果 …… 7
【公　示】
根研究学会会則 …… 16
根研究学会学術賞規定 …… 17
『根の研究』投稿規定 …… 18
『根の研究』原稿作成要領 …… 19
『根の研究』論文審査要領 …… 20
国際誌 Plant Root に掲載の 2024 年の論文 …… 21

根の研究
根研究学会（JSRR）

会員の皆様へ

告　示

○根研究学会 2025 年度総会の開催について

第 61 回根研究集会（亀岡笑・田島亮介実行委員長）の一部として，2025 年度の定例総会を開催します．皆様ご参加ください．

開催日：2025 年 6 月 14 日（土）（対面形式）

予定されている主な議題：2024 年度活動報告・決算，2025 年度活動方針・予算，規定等の変更について（審議事項については，その場でもご提案いただけますが，時間をかけて議論すべき議題や，資料の配付を必要とする議題については，なるべく事前に事務局までご提案ください）．

事務局からのお知らせ

１．電子版会誌のダウンロードについて

2025 年度から根研究学会ホームページおよび J-Stage から電子版会誌をダウンロードするためのパスワードを変更しました．ご注意ください．なお，ユーザー名の変更はありません．

根研究学会電子版会誌の URL　http://www.jsrr.jp/rspnsv/download.html

J-Stage の URL　https://www.jstage.jst.go.jp/browse/rootres/-char/ja

２．2025 年の根研究集会

・第61回根研究集会

申し込みの日程など詳細が決まりましたら根の研究，メルマガ，HPなどで告知します．

開催日時　**2025**年**6**月**14**日（土）～**15**日（日）

東北大学 青葉山キャンパスにて開催します！

・第62回根研究集会

秋の研究集会は長野県松本市の信州大学で**11**月下旬に開催する予定です．詳細が決まりましたら根の研究，メルマガ，HPなどで告知します！

・2026年度の集会　開催地については募集中です．立候補ありましたら事務局長にお知らせください．

３．学生会員の研究集会への参加費は無料です

学生会員の研究集会への参加費は無料です！学生会員は集会受付で学生証の提示をお願いいたします．この機会に是非，根研究学会にご加入いただけますよう，関係学生の皆さんにご周知いただけますようお願いいたします．なお，一般会員の研究集会への参加費は有料です．また，非会員の参加費は，一般・学生に関係なく，一般会員より 1,000 円程度高くなります．

次ページに続く

４.「苅住」国内研修支援の募集

・本支援は，根研究学会所属の若手会員（申請時の年齢が40歳以下）の国際的な活躍を支援するため，海外の学会等に参加して根に関する研究成果を公表したり調査に出向いたりするための渡航経費の一部を補助するものです.

・今回は会員間の横のつながりを強めることを目的に，ポスドク・学生会員向けに根に関する研究方法習得のためなどの国内研修の旅費として年間4件程度（前後期各1～2件，1件3万円を目安）を助成します.

・期間は前期を1月～6月，後期を7月～12月とします．受付は随時行い，各期間で採択数に達した時点で終了とします.

・審査方法は正副会長と正副事務局長で合議し，評議員にメーリングリストで報告後，決定します.

・採択された場合には「根研究学会海外活動支援助成採択」の証明書を授与するとともに，会誌に1ページの報告をしていただきます.

・申請書（書式A４　一枚）には，以下の書式に従い，１）申請者情報，２）訪問先，３）現在行っている主な研究の概要と訪問による研究進展効果（400字程度）を記載し，指導教官または受入研究者経由で以下の根研究学会事務局までE-mailの添付ファイルとして提出の上，郵送でもお送り下さい.

〒104-0033
東京都中央区新川 2-22-4 新共立ビル 2F
㈱共立内 根研究学会事務局
E-mail：neken2024@jsrr.jp

根研究学会「苅住」海外渡航支援申請書

申請題名：
１）申請者
申請者氏名：
申請者所属：
連絡先（住所　メールアドレス　電話番号）：
生年月日：
会員種別：　正 / 学生
指導教官または受入研究者氏名：　　印
所属・職：
２）訪問先
訪問場所（学会または連絡先　受入研究者名）：
訪問期間：
３）現在行っている主な研究の概要と訪問による研究進展効果（400 字程度）：

・採択された場合には，訪問終了後に会誌「根の研究」にレポートとして投稿（写真2枚程度を含む原稿量1ページ）をお願いします.

次ページに続く

５．投稿のお願い

投稿規定・原稿作成要領・論文審査要領の一部を改定しました．原稿のカテゴリーにおいて「オピニオン」を審査ありに変更しました．また研究動向や将来の発展性について紹介する「展望」 (審査なし) を新たに加えました．引き続き根の研究に積極的に投稿いただきますようお願いいたします．

また，原著論文のほかに，ご自身の一連の研究を他分野の会員にもわかりやすく解説したミニレビューを重視しております．学術功労賞・学術奨励賞の要件である，本会における研究成果の報告は，ミニレビューによる解説も認められていますので，積極的にご寄稿ください．研究手法や学生向けの実験･実習法の解説なども歓迎します．さらに，特集企画についても検討しますのでご提案ください．

投稿の際には，著者の執筆負担軽減と校正・編集作業の効率化のために整備された，テンプレートをご使用ください．テンプレートの word ファイルは，根研究学会ホームページ「根の研究投稿規定」(http://www.jsrr.jp/rspnsv/rule.html) からダウンロードできます．こちらにしたがって原稿を作成していただきますようお願いいたします．

６．根研ロゴの使用について

これまで「根研」のロゴを入れた T シャツなどのグッズを事務局が製作し，研究集会で販売することで，その収益を特別会計の収入としていました．しかし，売れ残りが生じると特別会計の赤字になってしまうため，なかなかグッズを積極的に製作できませんでした．そこで，会員の皆様が使用料を支払うことで根研ロゴを使用したグッズを自由に製作できるようにしています．

会員の皆様により気軽に根研ロゴを使用していただくため，2021 年 10 月 1 日からの使用料を 1 製品につき 100 円に値下げしました！これを機に，会員の皆様オリジナルの「根研」のロゴを入れた T シャツ，グッズを着て，根研究集会，職場や研究室のイベントに参加しませんか？積極的なご利用を期待しています！詳しくは事務局（neken2025@jsrr.jp）までお問い合わせください．

７．名簿データ更新のお願い

根研究学会では，会員の皆様にデータ登録をお願いしております．これは，会誌発送を確実にするとともに，会員相互の交流を目的とするものです．特に異動など変更が生じた方は，お手数ですが根研究学会ホームページ（http://www.jsrr.jp/）の「諸手続－名簿データ更新」の入会・登録変更フォームより，データを入力してください．なお，この名簿データをもとにして，隔年で会員名簿を皆様にお届けいたします．次回の名簿発行は 2025 年 6 月の予定です．

８．会費納入のお願い

2025 年度の会費をまだお支払いいただいていない方は, 下記の郵便振替口座に納入をお願いします. 請求書等の伝票をご希望の方は，事務局までお知らせください．

年会費（2025 年）：　電子版個人 3,000 円，冊子版（＋電子版）個人 4,000 円，冊子版団体 9,000 円（年度は 1 月－12 月です）

郵便振替口座　　口座名義（加入者名）: 根研究学会，　口座番号：00100－4－655313

［他の銀行から振り込みの場合 : ゆうちょ銀行　〇一九店（ゼロイチキユウテン）「当座」0655313 ］

根研究学会所在地・連絡先：　〒104-0033　東京都中央区新川 2-22-4　新共立ビル 2F

（株）共立内　根研究学会事務局　TEL：03-3551-9891／FAX：03-3553-2047

・メールアドレス　事務局：***neken2025@ jsrr.jp***　『根の研究』編集委員長：***editor2025@ jsrr.jp***

Plant Root 編集委員長：***editor2025@ plantroot.org***

・**Web サイト**　根研究学会：*http://www.jsrr.jp/*　『根の研究』ｵﾝﾗｲﾝ版：*http://root.jsrr.jp/*

Plant Root：*http://www.plantroot.org/*

連載を終えて～編集後記～

福澤加里部
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

「連載　根の研究の30年を展望する」は，歴代会長の皆様に筆を執っていただき，32巻1号（2023年3月発行，中野明正会長（当時））から始まり，33巻4号の大橋瑞江会長まで，森田茂紀初代会長から在任時期順にリレーいただきました．私には誰よりも早く原稿に目を通すことができるという特権を与えられました．皆様それぞれの根研への“思い”を拝見するのが毎回楽しみでした．連載記事の中から一部を抽出してみたいと思います．

設立当初のポリシーである「できるだけ手を抜いて，会員の役に立つことを」（記事タイトル），「根と根を取り巻く環境をキーワードにして，できるだけ多様な分野のメンバーが集まる研究交流の場を作ることを目指した」（森田，2023），「各会員がこの学会を「利用」してご自身の研究の発展につなげていただくことが学会の発展につながる，このような観点からの議論の発展を期待したい．」（山内，2023），「根研への参加が研究教育の視野を広げ，発展させてくれた」（谷本，2024），「…研究上の困難を共有し，理解しあい，知恵を出し合って前に進んでいくのが根研究学会だと思う」（小柳，2023），「雑誌をサステナブルにし軌道に乗せて下さり，尽力下さってきたその後の編集部の皆さまにも，本当に敬意を表します．」（唐原，2024），「根研の発展の経緯を見ると，集会にせよ，出版物にせよ，あまり形式にとらわれずに，まずはやってみようと動き出す度に，新しい仲間との出会いがあり，会員が増えてきたように思われる．」（阿部，2024）．「この記念集会では，今回の「30年を展望する」連載と同様に「これまでの50回，これからの50回」と題して，9つのグループ（水吸収，養分吸収，物質循環，測定／評価方法，環境応答／ストレス1，環境応答／ストレス2，生物間相互作用，形態形成，収量／生産性／成分）に別れて参加者全員で自由に議論しました．」（犬飼，2024）．「これらはいずれも根研究者間が対面で行ってきた相互理解，議論，共有から培われてきている．」（平野，2024）．「根研の強みは，「根」という素朴で分かりやすいターゲットが分野や立場を超えた人々を集め，研究集会でのなんでもありという自由で軽いノリが新しいつながりを生み，研究の難しさが強い結束力をもたらすことだと考える．」（大橋，2024）．また，前出の「できるだけ手を抜いて，会員の役に立つことを」（森田，2023）や「闊達な議論の場としての根研」（阿部，2024）など，示唆に富んだタイトルをつけていただいた記事もありました．

これまでの根研の歩みと先輩の皆様の思いに触れ，とても考えさせられました．さまざまな活動が行われていく中で，一貫しているのは「会員のために」であることが分かりました．そして今後も難しく考えずに，手を抜きながらも「会員のために」を意識し，また「やってみよう！」精神で，楽しく根の研究者が交流できる場であることが根研なのではないかと思いました．本連載は「今後根の研究に取り組み，次の30年の研究を担い極める方々の羅針盤になれば幸いである」（中野，2023）との企画趣旨で始まりました．皆様はどうお感じになりましたでしょうか？ 会員の皆様が根研が目指してきたことを改めて認識し，今後の30年に向けて考えるきっかけとなればうれしく思います．また，本連載は歴代会長によるリレー連載でしたが，会員の皆様で30年に際しての思いがありましたら，「根の研究」にてご披露いただければ幸いです．2025年度いっぱい受け付けたいと思います．

最後に，本連載にご寄稿くださった歴代会長の皆様に改めてお礼申し上げます．

引用文献

阿部淳 2024. 闊達な議論の場としての根研. 根の研究 33: 67-70.
平野恭弘 2024. 樹木根研究 20 年と根研究学会 30 年. 根の研究 33: 122-126.
犬飼義明 2024. 根の研究への“憧れ”や“想い”とその“支え”. 根の研究 33: 93-99.
唐原一郎 2024. 根の研究と Plant Root. 根の研究 33: 61-66.
森田茂紀 2023. 根研究会の設立趣旨―できるだけ手を抜いて，会員の役に立つことを―. 根の研究 32: 43-53.
中野明正 2023. 30 年を振り返り 30 年を展望する 次世代に期待する根の研究. 根の研究 32: 16.
大橋瑞江 2024. 次世代に期待する根の研究. 根の研究 33: 127-128.
小柳敦史 2024. 発足 15 ～ 16 年目の根研究会を振り返って. 根の研究 33: 35-38.
谷本英一 2024.「根の研究」が広げてくれた「研究と教育」. 根の

連絡先 〒098-2501　北海道中川郡音威子府村字音威子府 483
E-mail: caribu@fsc.hokudai.ac.jp

研究 33: 23-34.

山内章 2023.「根の研究」と根研究会. 根の研究 32: 79-82.

菜根譚　野菜の根の話

中野明正
千葉大学　大学院　園芸学研究院

27．トロロアオイ

トロロアオイはアオイ科の植物で，オクラに似た花を咲かせる．そのため「花オクラ」の異名もある．主に根から粘液物質が抽出され，それは「ネリ」と呼ばれる．この「ネリ」は和紙を作るのに欠かせない成分である．根を潰して水に出てくる「ネリ」は，これまた和紙の原料であるコウゾやミツマタなどの繊維をのり付けし結びつける役割を担う“添加材”である．和紙作りのほか，蒲鉾や蕎麦のつなぎ，漢方薬の成形材などにも利用されるようである．

和紙は長期保存に耐えることができ，文化庁によると8世紀の美濃国（現在の岐阜県）の和紙が現在も正倉院（奈良市）にあり，文化財としても非常に重要な“素材”といえる．このように日本文化の一翼を担う素材ということもあり，2014年には「日本の手漉（てすき）和紙技術」が無形文化遺産に登録された．具体的には細川紙（埼玉県），本美濃紙（岐阜県），石州半紙（島根県）の伝統技術が国際的に評価されたわけであるが，和紙全体の生産振興にも弾みがつくことが期待された．一方，日本特産農産物協会（2024）によると，原料である，コウゾやミツマタも同様の傾向であるが，トロロアオイの収穫面積は2002年の4 haから2022年の2 haへと半減している．生産量も2002年の60 tから2022年の13 tと1 / 5になっている．現在その生産量の約8割を茨城県が占めるのであるが，農家の高齢化のため，その生産は危機に瀕しているとの報道があった．

ちなみに，オクラは特に夏野菜としてみなさん食されるので，なじみの深いものと思われるが，花はたいへん美しく，同じアオイ科には，ハイビスカスもあるので，大ぶりの美しい花はアオイ科に多くみられるようだ．この「オクラの実」の別名をご存知だろうか？「レディースフィンガー（貴婦人の指）」である．確かに，フォルムはなめらかで，優美な指を彷彿させる．

オクラは，夏の野菜として家庭菜園にも定着してきた．ハイビスカスは南国の楽園を想起させる．一方で，同じような花を咲かせるトロロアオイは日本の文化と根っこでつながっているが，危機に瀕している．美しい花を見て，その根とその文化にも思いをはせてほしい．

参考文献

日本特産農産物協会 2024. 地域特産作物（工芸作物，薬用作物及び和紙原料等）に関する資料（令和4年産）.

トロロアオイの根と花

オクラの実と花

連絡先 〒277-0882　千葉県柏市柏の葉6丁目2-1
E-mail: anakano@chiba-u.jp

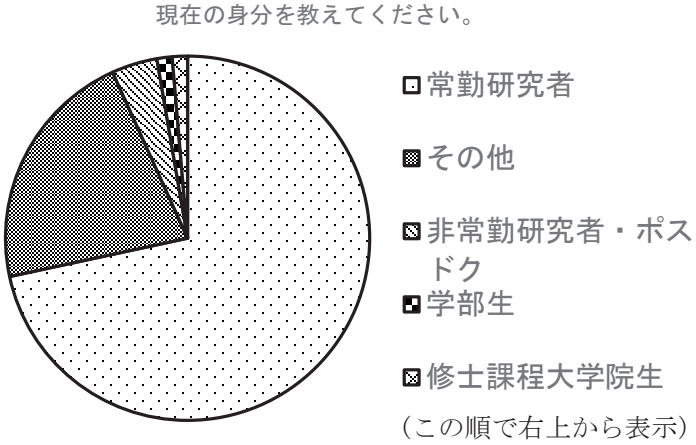
根の研究　発行形態に関するアンケート（2024 年 12 月〆切）集計結果

2024 年秋に実施した根の研究の発行形態に関するアンケートの集計結果をご報告いたします．74 名の方から，様々な視点からの多様なご意見をいただきました．いただいた回答をなるべくそのまま掲載いたします．なお，個人が特定されうる内容については，編集の過程で除外いたしました．皆様からいただいた回答において共通するのは，根研会員にとってよりよい方策は何かを考えておられることでした．ご協力いただいた皆様，大変貴重なご意見をお寄せいただき，ありがとうございました．今後，いただいたご意見も参考にしながら検討し，2025 年度総会にて提案したいと考えています．　よろしくお願いいたします．

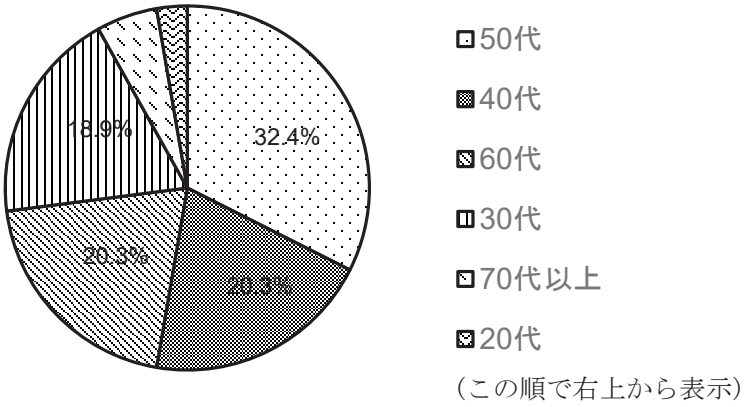
根研究学会事務局・根の研究編集委員会

〈アンケート説明文〉

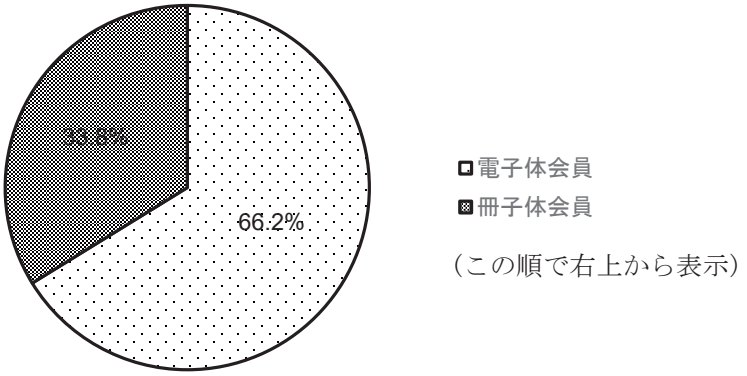
根の研究は 1992 年の発刊以来，年 4 回発行（冊子体，電子体）を行ってきました．論文のほかさまざまな記事が掲載され，会員間の情報交換のプラットホームになっています．また，この 30 年の間にインターネットが普及し，電子体会員区分の新設，論文のインターネット上（J-STAGE）での公開など，インターネットを活用したサービスも導入されています．その一方，投稿論文数が少ない現状で，各号に論文を掲載することが難しい場面が生じています（皆様には引き続きぜひ積極的な論文投稿をお願いします）．また，論文以外の記事を含めて J-STAGE に登録することにより，記事がより広く読まれるというメリットや，メールニュース（根研ニュース）など，紙媒体以外の連絡手段も活用することで，会員への迅速な連絡や編集業務の効率化がはかれる可能性があります．そこで，年 4 回発行にこだわらず，柔軟に発行形態を検討したいと考えています．その際に会員の皆様の意向を把握することは重要と考え，このたび発行形態に関するアンケートを実施いたします．なお，アンケートの結果を参考に事務局・「根の研究」編集委員会で検討し，必要に応じて今後の発行形態を提案させていただく予定です．



第 1 図　問［現在の身分を教えてください．］の回答



第 2 図　問［年齢を教えてください．］の回答



第 3 図　問［会員区分を教えてください．］の回答

上記回答の理由があれば教えてください．

【冊子体会員】

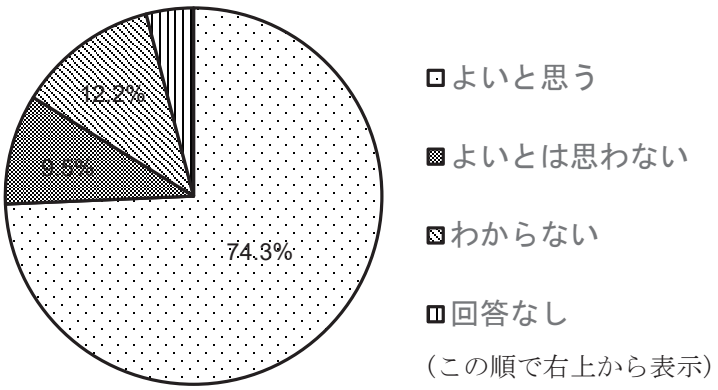
冊子じゃないと読まないから／冊子体の方が全体を眺めやすいので。ただ、必ず必要だということではありません。／冊子体は近くに置いてマーカーなどで加筆できるので便利ですし、電子体はカラー写真が多く、見ていて楽しいです。／携帯や PC などを通して見る事が得意ではない為です。／団体会員のため冊子体会員のみ／現在の身分は、名誉教授兼研究員です。根研究会の発展を願っております。／冊子は読みやすいため。／冊子としても保管していたいため。／アナログが理解しやすいから。／オンラインでは内容をしっかり見ないことがあるので冊子にしています／手元に冊子が届くと目を通すきっかけになると思っています。／冊子の方がじっくり読めるから。／紙媒体で、冊子として保存閲覧できるから。／団体会員のため

【電子体会員】

✓　会費が抑えられるため、色々なデバイスで閲覧できるため／場所を取らないから／複数人で冊子を読み回すことがなく、電子体で事足りるため／冊子を置くスペースがないため／保存や論文アクセスが容易／同じ所属内に会員がいるので冊子が重複してしまうため／電子体の方が簡便である／冊子はかさばるからです．年会費が同額だとしても電子体を選択

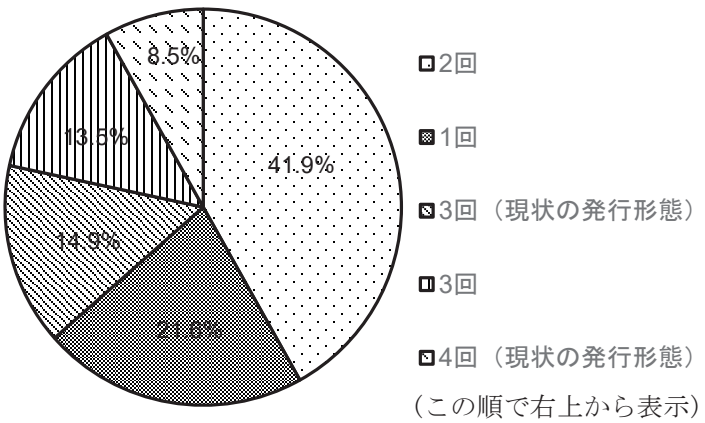
します．／電子媒体で必要に応じて閲覧できるため

冊子体会員からは，冊子の方がじっくり読みやすいという回答が複数ありました．電子体会員からは，電子体の方が簡便，さまざまなデバイスで閲覧できる，保存やアクセスが容易，場所を取らない，会費が抑えられるなどの回答がありました．どちらもよさがあり，どちらがよいかは会員によって異なることが分かりました．



第４図　問［現在、論文は J-STAGE に登録され、各号の発行に合わせて公開されていますが，それ以外の記事も含めて都度発行 （論文・記事ごとに発行時期が変わる） とすることについてどう思いますか？］の回答

都度発行にすることについては，肯定的な意見が多くを占めました．



第５図　問［その場合、冊子体（電子体を含む）の発行回数を年何回とするのが望ましい（読みたい）と思いますか？または現状の発行形態で年何回の発行が望ましいと思いますか？］の回答

上記回答の理由があれば教えてください．

【1 回 】

論文が集まらないのに無理に薄い冊子を作る必要はない。でも少なくとも年 1 回は必要だと思う。逆に投稿論文数が多い年は、例えば 10 報を超えたら 5、6 報を使って臨時号を出すなどしても良い。／冊子体の発行や郵送には労力と経費がかかるので、年 1 回の発行でもしかたがないかなと思います。／年 1 回以上あれば良いと思います。／私は全部電子体でいいと思っています。根研事務局からの情報、報告、会告等もメールで都度送付すればいいと思っています。ただ、論文を研究室内で読み回す、図書館で管理するなどある場合は冊子体のほうが有利なことも事実です。最低限、年 1 回分を冊子にまとめて発行しておけば年度ごとに発行された論文がまとまるのでいいのではないでしょうか。／電子体で問題なく、予算削減のため／一度に多くの情報を把握できる方が効率的／電子体が都度発行となるのであれば、冊子体にまとめるのは 1 回でもいいと思う。冊子体を望む会員にとっては 4 回のままがいいと思うが。冊子体の会員はどの程度の割合なのでしょうか。

【2 回】

編集委員の負担が少なくなるようにするといいと思います。ちょうど研究集会も年に 2 回ですので、半年に 1 回くらいがちょうどいいかなと思いますが、特に支障がないのであれば年 1 回でもいいと思います。／発行回数を減少しても、学会としての優遇を受けている項目などがある場合、その点は維持されるか等、ご検討いただけますと幸いです。／多少は発行回数が少なくても止むを得ないと思います。最新情報は WEB で読めますので。／ニュースレターや論文以外の記事を掲載する役割もある。都度発行や ML にして情報交換が十分にできるのか疑問が残る。情報発信の時期が決まっていた方がやりやすいのではないか。／年 4 回は編集される方の負担も大きいと思われるから。／都度発行だと、なし崩し的に発行しなくなる恐れがある気がします。4 回は厳しければ、2 回程度ではどうかと思います。／読む手間の軽減／4 回の必要はないですが，定期的であることには一定の価値があると考えています．毎回の根研究集会の前後で 2 回が良いと思います／どうしても根研よりも大きい学会と比較してしまうので、根研でどうしたらよいかを考える事はなかなか難しい。電子体を含む冊子体の変更検討内容・メリットに書かれているように、論文や記事 （報告など） は都度公開とするのであれば、学会の記録として冊子体という位置付けで考えて、都度公開・案内した内容もまとめて掲載するようにし、発行のタイミングは年に 2 回研究集会を実施しているので、そのタイミング （開催後？） に行えばよいのではないかと考えた次第です。／投稿数および運営体制を考えたとき、現在の 4 回の発行は、負担が大きすぎると感じます。オンライン上で都度発行ができるのならば、半期に一度ある集会にあわせて、年 2 回程度が現在の根研の体制的に良いように思います。／まとめの形として、年 2 回程度の冊子体発行が望ましい。／少なくとも論文以外は最低年 2 回，研究集会に合わせて発行するのが望ましいと考えます．冊子体である必要はないです．／年 2 回の研究集会に合わせて発行するなど、関連性があるといいのでは。

【3 回】

4 回分の論文が集まらないという状況なので、3 回または 2 回に減らしたうえで、論文以外の情

報を加えることで充実されるとよいと思います。／４回は多いので３回以下でよいと思う。論文は２回だと間が空きすぎかも。

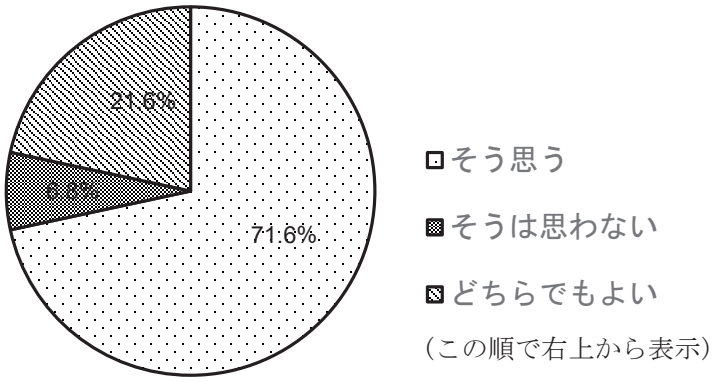
【3 回（現状の発行形態）】

根研 HP から冊子状態で全ての情報をダウンロードできるため。／年 2 回以下だと情報共有が難しくなる可能性があるから。

【4 回（現状の発行形態）】

発行回数が減ると、会員が論文発表する意欲が低下すると思います。会費を多少値上げしてでも、発行回数は維持した方が良いと思います。／都度発行にすることでスピード感が生まれ、研究者が世の中に成果をいち早く出すことができ、その後の展開にスピード感を持って応えられる。

「2 回」が最多で 42%，続いて 1 回（22%），「3 回（現状の発行形態）」15%，「3 回（都度発行）」14%，4 回（9%）でしたが，「3 回」を合計すると 28%，となり，「2 回」「3 回」の合計では 70%になりました．「1 回」回答者からは，電子体で十分，都度発行されるのであれば，冊子体は年 1 回で十分，一度に多くの情報を把握できる方が効率的，予算削減につながるなどの意見がありました．「2 回」回答者からは，都度発行だけだと、なし崩し的に発行しなくなる恐れがある，2 回程度ではどうか，定期的であることには一定の価値がある，根研究集会の前後で 2 回程度が良い，学会の記録として冊子体という位置付けで考える，投稿数および運営体制を考えたとき、現在の 4 回の発行は、負担が大きすぎる，などの意見が寄せられました．また，発行回数を減少しても、学会としての優遇を受けている項目などがある場合、その点は維持されるか，といった学会運営上の懸念が寄せられました．「3 回」回答者からは，４回は多いので３回以下でよいと思う。論文は 2 回だと間が空きすぎかも，年 2 回以下だと情報共有が難しくなる可能性がある，との意見が寄せられました．最後に「4 回（現状の発行形態維持）」回答者からは，発行回数が減ると、会員が論文発表する意欲が低下する，会費を多少値上げしてでも、発行回数は維持した方が良い，との回数を減らすことによるデメリットへの懸念が寄せられました．発行回数を減らすことのメリットに関してご意見があった一方，デメリットに関しての意見も寄せられました．

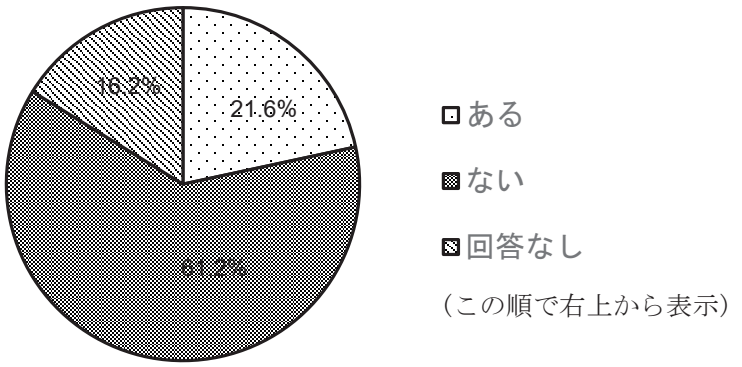


第 6 図　問［論文以外の記事は現在 CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）にて登録され，タイトル・著者名のみ公開されています．　今後、J-STAGE にて公開し、記事内容が閲覧できるように

なればよいと思いますか？］への回答

【そう思う】
J-STAGE への公開に費用が掛からないなら、便利になるし良いと思う。／J-stage でなくても良いので､閲覧できると良いと思います／読者､会員が増える効果があるのではないかと思います。／より広い研究者等に根の研究について知っていただけると期待。／報告やオピニオンなども有意義な内容が多いため。／内容までわかる方が望ましい／１か所にまとまっているほうが他の記事の閲覧時に目に入るため。／参考資料が検索しやすくなる。／ほかの記事も読みたくなるとき、読んでほしいときがあるから。／ジャーナルにとって Visibility は重要だと思います。／しかし，会費を払う意味が半減するような気もします。
【そうは思わない】
予算に余裕があれば、公開してもと思う。／会員である理由がなくなる／事務局が手続きなどで煩雑になるのでは。
【どちらでもよい】
根研以外の方が興味を持つのはほとんどが論文の内容だと思います。コストや労力が増加しないならしてもよいと思いますが、そうでないならあえてする必要はないと思います。／論文以外の記事に関する需要が不明／広く情報発信という姿勢も大事ですし、逆に J-STAGE に公開されていない記事は会員の特権という姿勢もありかなと思った次第です。／会告のような内容も登録することになる？とすれば、学会 HP で公開していればいいことであり、あまり細かいことまで登録しなくてもいいのではないかとも考えます。ただどちらもでよいとも思う気持ちもあります。／記事によっては閲覧できると良いですが，全てである必要はないと考えます.

論文以外の記事の J-STAGE 登録について，肯定的意見として，閲覧できると便利、検索しやすいなど会員にとってのメリットの他に，より広い研究者に根の研究を知ってもらえる，読者，会員が増える効果が期待できる，ジャーナルにとってビジビリティー（可視性）が重要，などの根の研究・根研究学会のアピールになるとの意見がありました．一方，否定的意見として，J-STAGE に公開されていない記事は会員の特権，会員である理由がなくなる，といった意見，事務局の手続きが煩雑になるのではとの心配が寄せられました．肯定的意見をお寄せいただいた方の間でも，費用が掛からない，予算に余裕があれば，など予算の負担にならないことが前提であるとの意見もありました．また，そのほかの提案として，記事によっては閲覧できると良いですが，全てである必要はない，会告などは学会 HP で公開していればいいとの意見がありました．メリット・デメリットの両面と費用や予算状況も考慮して検討していきたいと考えています.



第５図　問［(現在電子会員の方）発行回数を減らすことで削減できた印刷費や郵送費で，付録（根カレンダー）をつける可能性についても検討しています．その場合，冊子会員（電子会員より 1000 円増）に変更する可能性はありますか？］への回答

電子体会員のうち，現時点で付録がついても冊子体会員に変更する可能性がある方は 22%と比較的少数でした．

自由記載欄（発行形態・回数に関してご意見を自由にお書きください）

- ✓ 参画学会のいくつかが冊子体を廃止した。冊子が届けば全体を眺めていたが、届かなくなってからは全く読まなくなった。電子版の方が使い勝手は良いが、ざっと流し読みするには冊子の方が優れている。
- ✓ 私は根研の発足時からの会員です。「根の研究」ですが、最初は「年２回くらいかな？」というお話もあったのですが、他の多くの伝統的な学会が年４回だったので、私の方から「思い切って年４回にしていただけませんか？」とお願したのを覚えています。当時は、記事としては、原著論文の寄稿はありませんので、「研究」と称する半依頼原稿が中心でした。面白い研究をしていて、他の学会、特に外国の雑誌に原著論文を発表している先生方に寄稿をお願いしました。それに比べて現在は、依頼しなくても原著としての論文が毎年いくつか掲載されるので、隔世の感があります。今号（33 巻 3 号）の犬飼先生の記事によく表現されているように、根研の大きな目的は、今もなお、日本で根の研究をしている人達のつながりを深めることにあると思います。「根の研究」の編集に関わっておられる方々には、大変だとは思いますが、根研の会員以外の人の根に関する研究や活動にも着目して雑誌を編集していただけると読者としてはとてもありがたいです。「根の研究」さえ読んでいれば、日本の、あるいは世界の根の研究の動向が分かるようになれば最高です。発行形態や回数は時代の流れの中で変更するにしても、根研の目的が達成できるような内容になっていれば、それで良いと思います。
- ✓ ノベルティの付録は予算消化に見えるのであまり好きではありません。そもそも冊子会員の方は冊子がほしいのです。冊子にしかない情報を付加して冊子会員に誘導するのが健全

です。ノベルティは集会で現地で販売して運営資金にすればいいと思います。冊子に広告をつけたいが購読者が少ないとスポンサーが集まりにくいなどあるかもしれません。それは時代の流れなのでしょうがないです。年会費の請求の封筒に広告を入れるなど別の方法を模索する必要があると思います。

- ✓ 大変な業務を進めて頂いており、頭が下がります。なるべく付加が少なくなるように進めて頂ければ、今後の委員交代もスムーズになるかと思います。お忙しい中恐れ入りますが、引き続きどうぞ宜しくお願い致します。
- ✓ 根にまつわる、より幅広い記事・企画があればと思います。
- ✓ 都度発行だけではなかなか読まなくなると思う。パラパラとめくって読める冊子体が年に何回か（2 回か 3 回）あったほうがよい。都度発行にすると、連載記事の掲載機会が減ってしまうのではないかとの懸念がある。論文以外の読み物も充実するように、発行時期以外にも気を配る必要があるだろう。「根の研究」は学術論文だけを掲載している学術雑誌ではない。さまざまな会員間の情報交換の場である。ML などを活用するにしても、それを担保することが必要だと思う。
- ✓ 会費予算を有効に活用した変更は、大いに実施すべきと考えます。ただ不公平感の無いように検討いただければと存じます。
- ✓ 電子媒体が主体でも自分は構わない。研究を紹介するだけではなく、何か交流の場みたいなものがあってもいいと思う。
- ✓ 大小様々な学会に入会していますが、会員数が何千人の学会では毎月冊子体で学会誌 （論文誌は別にある） が届きます。また規模が小さくなってきますと 2 ヶ月に 1 回冊子体が届き、やはり論文誌は別にあり、解説や会告が掲載されています。さらには、1 年間に 1 回、冊子体が発行される学会もあり、そちらは論文はなく、解説や記録を載せているだけになり、会告などは HP、メーリングリストでのお知らせに留めています。根研究学会として「根の研究」をどういうものにしたいと考えるか、経費も掛かることなので、ある程度思い切った変更をしても良いようにも感じています。具体的なことが書けずに申し訳ありません。
- ✓ いずれにしても出版体制の維持は大変ですね…
- ✓ 電子体だけで充分である。根カレンダーは不要。
- ✓ 3 回/年発行で多少は視点を変えた課題、河川環境と浮き草の生育量など。
- ✓ 根のカレンダーは付録にするよりは、欲しい人に販売したほうが良いように思います。喜んで複数、買います。
- ✓ 冊子体は読みやすいが、印刷費や郵送費がかかるので冊子体の廃止を検討しても良いと思います。
- ✓ いつも楽しみに根研究を拝見しております。わたしは研究している側ではありませんので根に関する知識はあまりないのですが、素朴に根がもたらす役目や影響などに興味をもっている購読者であります。みなさまの根に関する熱心な研究が会員になることで見れるというのは本当にありがたい事だと思っております。ただここ最近は、やはり研究者方々の

情報交換の場だと強く感じており、なかなか素人が気楽に入っていけるような内容ではない事をお恥ずかしながら痛感している所です。個人的な内容で失礼いたしますが、根を通して物作りやアート作品を楽しんでいる事もあり、なにかインスピレーションを感じるような根の不思議をもっと別のテーマでもやっていただけたら嬉しいです。しかし、本来の根研究学会の目的内容とは異なる事かと思いますので、1 人の購読者として参考にしていただけましたら幸いです。

✓ ジャーナル発行は非常に労力と時間を使うと思います。発行に関わる方々に感謝とともに敬意を表します。

根研究学会会則

（2021 年 6 月総則改定・2022 年 1 月附則改定）

総　則

第 1 条 本会は，根研究学会（英語名称は Japanese Society for Root Research, JSRR)と称する．本会は，1992 年 1 月 1 日に根研究会として設立され，2013 年 1 月 1 日より根研究学会と改称する．

第 2 条 本会は，植物の根（その他の地下器官を含む，以下同様）およびこれを取り巻く環境に関する学術を発展させるとともに，同学の士の親睦を深めることを目的とする．

第 3 条 本会は，第２条で規定した目的を達成するために，つぎの事業を行なう．

１．研究集会・シンポジウムその他の会合の開催
２．会誌「根の研究」及び国際誌「Plant Root」の刊行
３．根研究学会賞の授与
４．「名誉フェロー」称号の授与
５．国際交流の推進
６．その他，本会の目的を達成するために必要な事業

第 4 条　本会の所在地は，事務局の所在地とし，附則においてこれを定める．

会員

第 5 条 本会の会員は，個人会員および団体会員とする．個人会員は本会の趣旨に賛同して入会した個人，団体会員は同じく本会の趣旨に賛同して入会した団体または機関とする．

第 6 条 本会に入会しようとする場合は，氏名，所属，連絡先，その他の必要事項を明記した文書に，会費を添えて本会に申し込むものとする．また，本会を退会しようとする場合は，その旨を文書で本会に連絡しなければならない．ここでいう文書は電子媒体も認める．

第 7 条　会員は，下記の年会費を前納しなければならない．2016 年度以降の年会費は，１．電子版会誌のみ購読の個人会員　3,000 円，２．電子版と冊子版会誌購読の個人会員　4,000 円，３．冊子版会誌のみ購読の団体会員 9,000 円．　ただし，１月をもって年度の始まりとする．長期に渡り会費を滞納した場合は，退会扱いにすることがある．

役員

第 8 条 本会に，つぎの役員をおく．会長１名，副会長２名，監査１名，評議員数十名，正副事務局長各１名．評議員数は，個人会員数の 5%～10%を目安とする．

第 9 条　会長は，その他の役員と協議しながら会務を統括し，本会を代表する．副会長は会長を補佐し，会長に事故あるときや長期に渡り不在となる場合に，その代理を務める．監査は，会務を監査する．評議員は，重要な会務を審議し，執行する．

第 10 条 会長は個人会員の中から選出する．選出方法は別にこれを定める．副会長，監査，評議員および正副事務局長は，個人会員の中から会長が委嘱する．

第 11 条 役員の任期は，２年とする．任期途中で役員の交代があった場合，後任者の任期は前任者の残余の任期とする．会長，副会長，監査，事務局長，副事務局長の各役職は連続して５年以上は重任できない．

委員会

第 12 条 第 3 条で規定した事業を遂行するために，重要な事業については，それぞれ委員（および委員長）をおく．委員（および委員長）は，会長が委嘱する．

会則の施行と改定

第 13 条 本会の会則は，1992 年 1 月 1 日より施行され，2022 年 1 月 1 日より現行の改定版の会則が適用される．

第 14 条 会則の改定は，本会の総会において審議し，出席者の過半数の賛成をもって行うことができる．

以上

附則

会の所在地

第 1 条　会の所在地は 2014 年 1 月より「東京都中央区新川 2-22-4 新共立ビル 2F （株）共立内 根研究学会事務局」とする．

会長および事務局長

第 2 条　2024 年度・2025 年度の会長と事務局長は以下のとおりである．

会長： 大橋 瑞江（おおはし　みずえ）
勤務先： 兵庫県立大学　環境人間学部
自宅住所：〇〇〇〇
事務局長：陽川 憲（ようかわ　けん）
勤務先：北見工業大学　工学部
自宅住所：△△△△

以上

［自宅住所は個人情報保護のため略記してあります］

根研究学会学術賞規定

1. 本会は，会則第 3 条に基づき，本規定を定める．

2. 本会は，植物の根（その他の地下器官を含む，以下同様）およびこれを取り巻く環境に関する学術の発展に寄与したものに対して根研究学会賞を贈り，これを表彰する．

3. 根研究学会賞としては，根研究学会学術功労賞，根研究学会学術奨励賞，根研究学会学術論文賞，根研究学会学術特別賞，および根研究学会優秀発表賞をおく．根研究学会学術功労賞および根研究学会学術奨励賞は，植物の根およびこれを取り巻く環境に関する学術の発展に寄与した根研究学会会員の研究を対象とする（すでに原著論文として発表されたもので，少なくともその一部が，根研究学会の研究集会・シンポジウムなどの会合，あるいは会誌などで会員に紹介されていること）．根研究学会学術論文賞は，植物の根およびこれを取り巻く環境に関する学術に寄与した根研究学会会員により「根の研究」または「Plant Root」に公表された論文を対象とする．なお発表形態（例えば，原著論文であるか総説であるか）を問わない．根研究学会学術特別賞は，植物の根およびこれを取り巻く環境に関する学術の発展に寄与した応用研究，技術開発，著作活動等の業績を対象とする．会員であるかどうか，また，業績の形態（例えば，出版物かどうか）を問わない．根研究学会優秀発表賞は，根研究学会の研究集会における優秀な口頭発表ならびにポスター発表を対象とする．

4. 根研究学会学術論文賞および根研究学会優秀発表賞を除く各根研究学会賞はいずれも会員もしくは関連分野の研究者などから推薦のあった対象について，根研究学会学術論文賞は「根の研究」または「Plant Root」の編集委員から推薦のあった対象について，いずれも評議員が審議し，その結果を踏まえて，会長および副会長が協議して決定を行なう．ただし，会長および副会長は，根研究学会学術論文賞および根研究学会優秀発表賞を除き，任期中に推薦すること，あるいは推薦されることができない．根研究学会優秀発表賞は研究集会内で決定を行なう．

以上

各賞の業績や候補者年齢などの目安については，会誌『根の研究』第 20 巻 1 号を参照するか，事務局にお問い合わせ下さい．

各賞の英語名称は以下の通りです．

根研究学会賞：Academic Awards of Japanese Society for Root Research

学術功労賞：The JSRR Award for Excellent Achievement in Root Research
学術特別賞：The JSRR Special Prize for Applied Root Research
学術論文賞：The JSRR Excellent Paper Prize
学術奨励賞：The JSRR Young Investigator Award
優秀発表賞：The JSRR Excellent Presentation Award

『根の研究』
投稿規定

（2025年3月改定）

1．本誌は植物の根およびこれを取り巻く環境に関する「原著論文」や「短報」のほか，新しい実験・調査技術を紹介する「技術ノート」，ご自身の研究を中心に紹介する「ミニレビュー」，特定のテーマに関する「総説」，「オピニオン」，「展望」，学生等初心者を対象とした実験手法の開発・工夫を紹介する「教育」，学会・シンポジウムなどの「報告」，「文献紹介」，「研究室紹介」，「会員の研究紹介」などの原稿を募集しています．これまでに掲載されていないジャンルや特集企画についても検討しますのでご提案下さい．

2．原著論文，短報，総説，ミニレビュー，技術ノート，教育，オピニオンについては，匿名の査読者による審査に基づいて，採用・不採用を編集委員長が決定します．なお，上記査読付き論文類については，J-STAGEにも掲載されます．

3．根研究学会ホームページ「根の研究投稿規定」（http://www.jsrr.jp/rspnsv/rule.html）に掲載の原稿作成要領・テンプレートをダウンロードし，必ずそれを使用して原稿を作成し，PDFに変換して編集委員長宛にお送り下さい．また投稿に際して，同じく掲載のカバーレターをご使用ください．原稿送付はE-mailの添付ファイルによる送付を基本としますが，ファイル容量が膨大なときにはご相談ください．

4．画像・動画や生データ等の補足資料を原稿に添付することができます．補足資料は採用決定後に著者によりJ-STAGEのデータリポジトリ (J-STAGE Data) にファイルのアップロードおよびメタデータ登録をしていただきます．補足資料についても審査の過程で修正を求められることがあります．J-STAGE Dataにおいては，データは論文の出版 (公開) とともに公開され，DOIが付与されます．その他のデータベースをご利用希望の場合はご相談ください．

5．著者名は本名を原則とします．ペンネームや匿名での投稿を希望される場合はご相談下さい．

6．採用決定後は，原則として毎年3月・6月・9月・12月の4回発行の冊子体および本会ホームページでのオンラインで掲載されます．各発行月の前月下旬に掲載記事を最終決定します．

7．著者に課せられる投稿料はありません．また，原稿料や謝礼金もありません．ただし，原稿作成・送付の過程で生じる著者側の経費については学会では負担しませんのでご了承下さい．図表は原則として著者自身で作成して下さい．やむを得ずトレースなどが必要な場合には，実費を負担して頂きます．図は，オンライン版のPDFはカラーが使えますが，印刷は原則として白黒です．印刷もカラーをご希望の場合には，カラー印刷の経費をご負担いただきます．別刷はPDF版を無料で進呈致します．紙印刷の別刷を希望される方には経費著者負担にて50部単位で作成します．採択後，必要部数をお知らせください．単価についてはお問い合わせください．

8．オープンアクセスは，論文の情報発信力を高めるためのオプションサービスで，論文受理後に著者がオープンアクセス料 (20, 000円/編) を支払うことにより，根研究学会非会員でも出版と同時に論文にアクセスできるようになります．非会員がJ-STAGEに掲載された論文を出版1年後にアクセスできるディレイド・オープンアクセスは無料 (0円) です．

9．原稿および編集に関する問い合わせは「根の研究」編集委員長宛とします．

１０．本誌に掲載された著作物の著作権は根研究学会に帰属します．ただし，著者自身による再利用・再加工は自由にできます．掲載された著作物・画像は，根研究学会により，電子ファイルやバックナンバー集などとして再発行・再配布されることがあります．投稿後，本誌への掲載が決定した時点で，著者 (共著者を含む) にこれらをご了解いただいたものとみなします．一方，J-STAGE Data等データリポジトリに公開された補足資料の著作権は著者または所属機関の帰属とします．

１１．所属機関のリポジトリに登録された博士論文でも学会誌などに未掲載の内容については掲載可とします．ただし，以下の点に注意してください．(1) 元原稿が存在する旨を付記してください（「本稿は，〇〇大学大学院〇〇研究科提出の博士論文の一部に，加筆修正を行った」など）．(2) 博士論文そのままではなく，単独の論文として寄与しうるよう必要な改変・修正を施してください．

＜原稿送付先: 2024-25 年度＞
〒098-2501 北海道中川郡音威子府村字音威子府 483
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター中川研究林
「根の研究」編集委員長　福澤加里部
電子メール：editor2025@jsrr.jp，Tel:01656-5-3216

『根の研究』原稿作成要領

（2025 年 3 月改定）

校正時に修正が少なくなるので，投稿には必ず根研究学会ホームページから『根の研究』原稿作成要領・テンプレートをダウンロードしてご利用ください (http://www.jsrr.jp/rspnsv/rule.html)．ここに記載の内容に加えて，テンプレート中に記載された，句読点の表記法や文献の引用方法などの原稿の体裁に関する詳細な説明に従って作成してください．

1．本テンプレートを必ず使用し，本文，図，表，写真などを 1 つのファイルとして原稿を作成してください．そして作成したファイルを PDF に変換して原稿をお送りください．ファイル名には，投稿者名を記入してください．論文採択後，掲載のために解像度の良い図，表，写真ファイルを提出していただくことがあります．PDF 変換が難しい場合にはご相談ください．

2．以下の要素で原稿を構成して下さい．各箇所における説明も参照してください．

(1) 表題（原著論文・短報・総説・ミニレビュー・技術ノート・教育・オピニオンは英文併記）

(2) 著者名・所属（原著論文・短報・総説・ミニレビュー・技術ノート・教育・オピニオンは英文併記）

(3) 要旨（原著論文・短報・総説・ミニレビュー・技術ノート・教育）日本語600字以内，英語250単語以内．ただし，短報，教育とオピニオンの英語要旨は任意とします．原則として著者の責任で英文添削を受けたものを投稿して下さい．困難な場合には編集委員会にご相談下さい．その他のジャンルについて要旨の有無は任意とします．

(4) キーワード（原著論文・短報・総説・ミニレビュー・技術ノート・教育）:5 つまでとし，和文は五十音順，英文はアルファベット順に記載してください．その他のジャンルについてキーワードの有無は任意とします．

(5) 本文：適宜小見出しをつけながら，読みやすいように作成して下さい．読者には様々な分野の方がいますので，専門用語には説明をつけるなどご配慮下さい．原著論文および短報については，緒言・材料と方法・結果・考察（あるいは結果と考察）・謝辞という体裁で作成してください．

(6) 引用文献は下記「引用文献」欄に記載の説明に従ってください．

(7) 図表は図・表ごとに 1 ページを使用して本文の後に作成してください．本文中の挿入希望位置があれば，テキストを原稿右端に挿入して示してください (下記結果欄の記載例を参照ください)．著作権・版権を侵害するような引用・複写をしないようご注意ください．他の研究者またはご自身の既発表論文をもとにご自身で作図した場合にも，図の説明文中に（Smith et al., (1992) より改変）などの但し書きを加えてください．図表以外でも，版権者の承諾なしに他の文献から複写したものをそのまま掲載することはできませんのでご注意ください．また，図および図中の文字の大きさは，段組1段分または2段分の幅を考慮して作成してください（1ページ最大字数 2100 字，21 字／行×50 行／段×2 段）．

3．図は，オンライン版の PDF はカラーが使えますが，印刷は原則として白黒ですので，グラフなどは色の違いだけでなく濃淡の差などで凡例の区別がつくようにご配慮下さい．印刷もカラーをご希望の場合には，カラー印刷の経費をご負担いただきます．

4．原稿の分量は，短報・報告・文献紹介・研究室紹介については刷り上がり2ページ以内を目安にし，その他は特に分量を指定しません．

5．その他，詳細については，最新号をご参照ください．

『根の研究』
論文審査要領

（2025年3月改定）

1．　編集委員長は編集委員を委嘱します.
2．　編集委員長は投稿原稿の内容に対応する編集委員を選び，審査を依頼することがあります.
3．　編集委員長あるいは編集委員は査読者2名を選び，投稿原稿の校閲を依頼します．ただし，短報とオピニオンについては査読 者を1名とします.
4．　著者は査読者候補を挙げることができます.
5．　査読結果に基づき，編集委員は論文の採否を編集委員長に答申します.
6．　投稿原稿の最終的な採否は編集委員長が決定します．採択決定日を受理日とします.
7．　修正を求めた原稿が3ヶ月以内に再提出されない場合は取り下げたものとみなします.
8．　採択された論文の掲載順序や体裁は編集委員長が決定します.
9．　校正は著者が行います．校正に際しては原稿の改変を行ってはいけません.

国際誌 *Plant Root* に掲載の 2024 年の論文

Plant Root Editors in Chief

平野恭弘，間野吉郎，中野明正，野口享太郎

2024 年に ***Plant Root*** に掲載された論文の一覧です．今年も，多くの方からの投稿・寄稿で ***Plant Root*** を読み応えのある雑誌に高めて頂くよう，皆さんのご協力をお願いします．2023 年 1 月より「Plant Root」の掲載料が有料化され，根研究学会会員 20,000 円/編，非会員 25,000 円/編となりました．***Plant Root*** の論文閲覧・投稿規定の確認などは，**http://www.plantroot.org/** をご覧頂き，投稿やお問い合わせは editor2025@plantroot.org までご連絡ください．また，投稿の際には ***Plant Root*** のトップページに掲載した「論文の本文」と「送り状」の雛形 (Manuscript sample (docx), Cover letter sample (docx)) のファイルをお使いください．

原著論文 4（査読制）

Original Research Article
Root characteristics on different training methods of cucumber production in hydroponic system
Nethone Samba, Satoru Tsukagoshi, Akimasa Nakano
2024 Volume 18 Pages 1-9
https://doi.org/10.3117/plantroot.18.1

Original Research Article
Effects of water regime and inoculation with arbuscular mycorrhizal fungi on mycorrhizal communities of roots of rice and pearl millet in upland and lowland fields
Phoura Y, Ryo Ohtomo, Akihiko Kamoshita
2024 Volume 18 Pages 10-21
https://doi.org/10.3117/plantroot.18.10

Original Research Article
Evaluation of rice breeding lines containing root QTLs under different water management environments
Vivek Deshmukh, Akihiko Kamoshita, Nelson Amézquita, Natalia Espinosa, ...
2024 Volume 18 Pages 22-34
https://doi.org/10.3117/plantroot.18.22

Original Research Article
Soybean gene expression correlated with symbiotic rhizobial nitrogen fixation activity
Shunichi Yano, Teruya Takushima, Tatsuhiro Ezawa, Yusaku Sugimura, Aki ...
2024 Volume 18 Pages 35-47
https://doi.org/10.3117/plantroot.18.35

論文の審査状況について

2024 年に ***Plant Root*** に投稿された論文数は 11 報（7 報が海外からの投稿）で，そのうち受理されたものが 3 報，審査中が 3 報です．投稿数は前年の 8 報から 11 報とやや増加しましたが，国内からの投稿数（前年: 5，今年: 4）や受理の数（前年: 2，今年: 3）はあまり変わっていません．編集委員や審査員の皆様には改めて感謝申し上げます．今後も査読や運営に関するご助言などご支援いただけますよう，よろしくお願いいたします．

Plant Root に投稿された論文は，編集委員と審査員によって accept・reject に拘わらず非常に丁寧に審査されています．この労力を多くの根研の会員の皆様の投稿論文に向けられれば良いと思っております．根研究会で発表された成果など，会場で Editors in Chief や編集委員に声をかけて

いただければ投稿に向けた相談に乗りますので，是非 ***Plant Root*** にご投稿ください！

Plant Root ホームページ：http://www.plantroot.org/index.htm

J-Stage (*Plant Root*)：https://www.jstage.jst.go.jp/browse/plantroot/-char/en

編集委員 (2024 年 1 月～2025 年 12 月)

Editors in Chief

Dr. Yasuhiro Hirano (Nagoya University, Nagoya, Japan), **Dr. Yoshiro Mano** (Institute of Livestock and Grassland Science, NARO, Nasushiobara, Japan), **Dr. Kyotaro Noguchi** (Forestry and Forest Products Research Institute, Tsukuba, Japan), **Prof. Akimasa Nakano** (Chiba University, Matsudo, Japan)

Senior Editorial Assistant

Dr. Satoshi Shimamura (Tohoku Agricultural Research Center, NARO, Daisen, Japan)

Subject Editors (in alphabetical sequence of family names)

Dr. Tomomi Abiko (Kyushu University, Fukuoka, Japan), **Dr. Hideki Araki** (Yamaguchi University, Yamaguchi, Japan), **Prof. Hiroyuki Daimon** (Ryukoku University, Kyoto, Japan), **Dr. Karibu Fukuzawa** (Hokkaido University, Sapporo, Japan), **Dr. Shintaro Hara** (Institute for Agro-Environmental Sciences, NARO, Tsukuba, Japan), **Prof. Maki Katsuhara** (Okayama University, Kurashiki, Japan), **Dr. Akihiko Kinoshita** (Kyushu Research Center, Forestry and Forest Products Research Institute, Kumamoto, Japan), **Dr. Yoshihiro Kobae** (Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, Japan), **Dr. Bohdan Konôpka** (National Forest Centre, Forest Research Institute Zvolen, Zvolen, Slovakia), **Dr. Katashi Kubo** (Tohoku Agricultural Research Center, NARO, Fukushima, Japan), **Dr. Takeshi Kuroha** (Institute of Agrobiological Sciences, NARO, Tsukuba, Japan), **Dr. Naoki Makita** (Shinshu University, Matsumoto, Japan), **Dr. Atsushi Matsumura** (Osaka Prefecture University, Sakai, Japan), **Prof. Motoyasu Minami** (Chubu University, Kasugai, Japan), **Prof. Mikio Nakazono** (Nagoya University, Nagoya, Japan), **Prof. Atsushi Ogawa** (Akita Prefectural University, Akita, Japan), **Prof. Mizue Ohashi** (University of Hyogo, Himeji, Japan), **Dr. Atsushi Oyanagi** (NARO, Tsukuba, Japan), **Dr. Kosala Ranathunge** (The University of Western Australia, Perth, Australia), **Prof. Yowhan Son** (Korea University, Seoul, The Republic of Korea), **Dr. Koya Sugawara** (NARO Institute of Livestock and Grassland Science, Nasushiobara, Japan), **Dr. Daisuke Takata** (Fukushima University, Fukushima, Japan), **Dr. Yusaku Uga** (Institute of Crop Science, NARO, Tsukuba, Japan), **Dr. Akihiro Yamamoto** (University of Miyazaki, Miyazaki, Japan), **Dr. Takaki Yamauchi** (Nagoya University, Nagoya, Japan), **Dr. Ken Yokawa** (Kitami Institute of Technology, Hokkaido, Japan)

Root Research 根の研究

編集委員長	福澤加里部	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
副編集委員長	松波　麻耶	岩手大学農学部
	神山　拓也	宇都宮大学農学部
編集委員	岩崎　光徳	農研機構・果樹茶業研究部門
	宇賀　優作	農研機構・作物研究部門
	小川　敦史	秋田県立大学生物資源科学部
	篠遠　善哉	農研機構・東北農業研究センター
	辻　　博之	農研機構・北海道農業研究センター
	仲田(狩野)麻奈	名古屋大学農学国際教育研究センター
	菱　　拓雄	九州大学農学部付属演習林
	松村　　篤	大阪公立大学大学院農学研究科
	南　　基泰	中部大学応用生物学部
	山崎　　篤	農研機構・東北農業研究センター
	山本　岳彦	農研機構・東北農業研究センター
上級編集補佐	島村　　聡	農研機構・東北農業研究センター

事務局　〒104-0033　東京都中央区新川 2-22-4　新共立ビル 2F
株式会社共立内　根研究学会事務局
Tel：03-3551-9891
Fax：03-3553-2047
e-mail：neken2025@jsrr.jp

根研究学会ホームページ　https://jsrr.jp

年会費　電子版個人 3,000 円，冊子版（＋電子版）個人 4,000 円，冊子版団体 9,000 円

根の研究　第 34 巻　第 1 号　2025 年 3 月 15 日印刷　2025 年 3 月 20 日発行
発行人：大橋瑞江　〒670-0092　兵庫県姫路市新在家本町 1 丁目 1-12
兵庫県立大学　環境人間学部
印刷所：株式会社共立　〒104-0033　東京都中央区新川 2-22-4　新共立ビル 2F

Root Research

Japanese Society for Root Research